

筋ジス患者 石川さん (吉野川市)

闘病 郷愁 切々と

初の個人句集を出版した筋ジス患者の石川さん。吉野川市の徳島病院



句集を自費出版

30・31日 入院先で展示

全身の筋肉が衰えていく難病、筋ジストロフィーと闘いながら、入院先の国立病院機構徳島病院（吉野川市鴨島町）で俳句を創作している石川文良さん（73）は、俳号・北星が、初の個人句集「やまびこ」を自費出版した。少年時代の思い出や闘病生活への思いを込めた70句を収録。病院で今月末に開かれる筋ジス文化祭で展示する。

石川さんが6年前に俳句を再開してから詠んだ力作を季節ごとに分けて掲載した。

「呼吸器の音休みなく初明かり」は、人工呼吸器が欠かせない闘病生活のつらさを詠んだ句。入院仲間の前向きな姿に勇気をもたえ、「リハビリのかけ声揃う秋の風」とつづった。「秋祭り川越

えて聞く太鼓の音」といった郷愁の句もある。

三好市山城町で生まれ、17歳で筋ジスと診断された。香川県内の職業訓練校を卒業し、電気店の営業や実家の農作業にいそしんだが、体が不自由になるにつれて入院を繰り返すように。30年ほど前からは徳島病院で療養生活を続けている。

俳句との出会いは30歳のとき。ラジオの俳句番組がきっかけで興味を持ち、県内最大の俳句結社「ひまわり俳句会」で腕を磨いた。徳島病院に入院してからは活動を休止していたが、6年前に病院職員の勧めで再開。今は院内につくった俳句同好会の代表を務め、仲間と切磋琢磨している。

石川さんは「念願がかなって感無量。句集を通じて多くの人と触れ合えたらうれしいので、ぜひ感想を寄せてほしい」と話している。句集は70部で1000部印刷。30、31日の文化祭で展示するほか、希望者には限定30部を寄贈する。